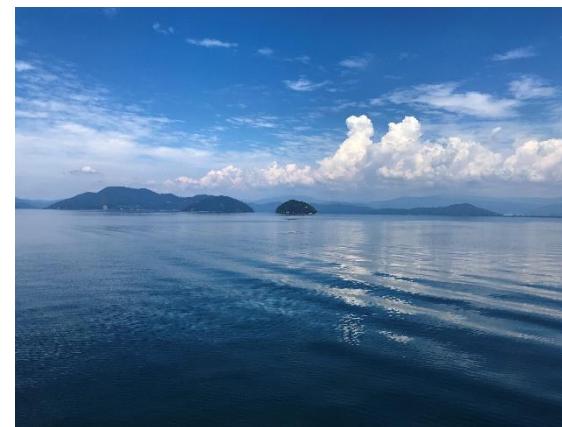


※この模式図は、琵琶湖の状況について関係者の意見等を整理したものであり、各事象間の関係性について科学的に実証されたものではありません。

滋賀県では、琵琶湖の生態系のバランスを是正し、本来の在来魚介類のにぎわいを復活させるため、行政、事業者の枠をこえた「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームを結成し、琵琶湖で生じた現象の把握や課題の整理を行っています。本チームで議論した内容を踏まえ、令和6年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性を時系列に沿ってまとめました。なお、このまとめはチーム員の個人的な意見を幅広く取り入れており、学術的な検証を得ていない結果を含んでいることにご注意ください。

令和6年度は令和5年度と同様に、年間を通じて気象の変動が大きく、猛暑や少雨、多雨などが琵琶湖の水質・生態系に大きな影響を与えました。北湖では、令和5年度末の全層循環により表層でリン酸態リンの濃度が過去最大となり、春先にそれを栄養として小型の植物プランクトンが増加しました。その後、それを餌とするミジンコ類が増加しましたが、5～6月の降雨による栄養塩の流入もあって、ミジンコ類の餌にならない大型緑藻のミクラステリアスが増殖し、透明度が低くなりました。増殖したミクラステリアスは表層の硝酸態窒素を吸収して半月ほどで湖底まで沈降し、そこで酸素を消費して、9～12月にかけて湖底は貧酸素（一部では無酸素）状態となりました。そのため、湖底でイサザやヨコエビなどの死亡を確認しました。表層で窒素が枯渇したことや猛暑により、8月は植物プランクトンが少なく、透明度が高くなりました。冬は特に2月に気温が大きく下がった影響で2月中旬に全層循環を確認しましたが、その後表層のリン酸態リン濃度が大きく上昇しました。南湖では、8～11月にかけて水草が大量に繁茂し、また8月にはアオコも発生しました。2月には透明度が非常に低くなりましたが、クロロフィルa濃度は高くなかったため、沈降物の巻き上げや、少雨により湖水が滞留したことなどが要因として考えられます。

魚介類については、令和5年度に引き続きアユが少なく、記録的な不漁が続きました。加えて夏の猛暑や9月の少雨の影響により、河川の水温が十分に下がらず水量も不十分で、産卵数は半年の半分以下となりました。特に、春までの漁獲対象として重要な9月生まれのアユは非常に少なくなりました。人工河川からはアユの仔魚が順調に流下しましたが、その後餌となるケンミジンコの幼生が少なかったことも一因となり十分に生育できず、12月以降の氷魚・アユは再び記録的な不漁となりました。ワカサギや南湖のホンモロコは漁獲量が増加してきていますが、やせたものが多く、成長に必要な時期に餌が十分でないことも懸念されています。



透明度の高い北湖（8月）



南湖で発生したアオコ（8月）



南湖で大量繁茂した水草（9月）



北湖湖底のイサザの死骸（10月）